

NEWSLETTER No.81 ISSN 1340-5578
TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
The Society for Research in Asiatic Music Jan 31, 2011

社団法人 東洋音楽学会 会報 第81号

発行 (社)東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
●E-mail : LEN03210@nifty.com ●ホームページ : http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/

目次

第61回 大会レポート	1	西日本支部からのお知らせ	13
ICTM (国際伝統音楽学会) に関するお知らせ	10	沖縄支部からのお知らせ	13
会員の受賞	11	会員異動	13
月溪恒子先生のご逝去	11	図書・資料等の受贈	15
通常理事会・総会議決事項のお知らせ	11	新刊書籍	15
臨時理事会議決事項のお知らせ	11	新発売視聴覚資料	15
会費納入のお願い、会費割引のお知らせほか	12	編集後記	16
第28回 田邊尚雄賞アンケートのお願い	12	第41回通常総会議事録(抄)・添付書類	17
東日本支部からのお知らせ	12		

第61回 大会レポート

(2010年11月13~14日/東京学芸大学 小金井キャンパス)

第1日 (11月13日)

◇プレセッション

大会初日は、北京中央音楽学院から研究者をお招きして、「日中仏教音楽の諸相」をテーマにした公開講演会のプレセッションから始まった。本学会で初の試みというこの企画には、午前中から多数の聴衆が集まって活発な質疑応答がなされた。

研究発表は、1. 傅暮蓉氏「現代に伝わる古刹の風—高旻寺見聞」、2. 楊秋悦氏「古琴における琴僧」(題目変更)、3. 遠藤徹氏「高野山東京別院伝来の古絵図と高野山の法会」の3本。発表はそれぞれの母国語で行われ、通訳は新堀敏乃氏と孟繁杰氏が担当した。

1. は、江蘇省揚州の八大古刹のひとつ、臨濟宗高旻寺の現状に関するもので、同寺の華嚴法会を収録した自作のDVDが披露された。まず司会の澤田篤子氏から日本の臨濟宗とは全く違うとの印象が述べられ、つづくフロアからの質疑では、

日中間の仏事のあり方や用語解釈の相違点に議論が集中した。具体的には、日本では秘仏が祀られる「後堂」に関して、高旻寺では大日如来を祀っていること(後日確認したところ、大日如来は本堂の本尊という)、五体投地の礼拝や行道などの所作は「儀礼」ではなく「修行」と捉えること、「労働」や朝の勤行を含めて「〇〇法会」と呼ぶこと、「労働」とは寺での作務すべてをさし、自給自足で営まれていること、梵唄はすべて口伝で楽譜はないことなどが回答された。

2. は、中国における仏教受容の特色でもある「琴僧」(古琴を演奏する出家者)について、北宋以降に形成された琴僧の系図や、彼らの遺した様々な文献の一部をスライドで示しつつ、禅の思想と琴楽の関係、17世紀に日本人へ琴楽を伝授した東皐心越禅師の事績、近代以降の琴僧の活躍にまで幅広く言及した。琴は古代より法器とされた神聖な楽器で、その演奏は精神修養であると同時に「天地人」という世界観の体現であった。質疑では、幾多の楽器のなかから琴が法器とされた由縁について、琴が天地人を繋ぐ器材として存在したこと、さらに、弦楽器により高い価値を置いた可能性はあるか、楽器の材料が貴重であるためか、といった議論に展開した。また、1950年代の名人の録音により、「天地人」三者の音色や技法の相違点が示された。

3. は、本学会で過去にも報告したテーマの延長である。今回は、高野山東京別院所蔵の古絵図に描かれた山内各場面のうち、壇場図中央の僧侶の行列に着目し、スライドで細部を示しながら、当該場面が金堂修正会である可能性などを指摘した。また、天野社における庭讃の場面で、僧侶による鳴物や讃の唱法の口伝などを史料に基づいて検証した。時間の関係で質疑は省かれたが、まとめとして、高野山の法会が江戸時代には壇場だけでなく慈尊院や天野社でも行われており、特に天野社では音楽を伴った点が強調された。

日本仏教を知る上で中国や韓半島との比較は必須であり、今後もこうした交流の機会を積極的に設けるべきだと思う。本企画を発案した遠藤徹氏や大会実行委員各位に賛辞を呈したい。

近藤静乃

◇公開講演会・公演

澤田篤子副会長の開会挨拶に続き、遠藤徹氏が講師を紹介、東京文化財研究所名誉研究員佐藤道子氏の登壇となる。氏の公開講演「わが国における仏教撰取の一断面」は、大会冊子の要旨にそって進行した。そこで大概是そちらに譲るが、氏は公に仏教が日本に伝播した6C半ばから史料をたどり、初期法会に読経と設齋が多かったことを指摘、設齋は信者の施行として、読経は外国語であったから当初日本人は内容よりも呪力に期待したと推察。国語で唱えられるようになると、8C半ばには内容が理解・意識され日本的な展開を見せて、9C末～10C初めには「蔵人式」から〈教化〉が導師に即興的に唱えられ同姓性があったこと、『枕草子』から11C前半には巷間に説経所等が設けられ内容にわたる布教が行われるようになったこと、『玉葉』から鎌倉期には仏教理解に深化が見られ、説経上手が出現、澄憲が安居院流を確立するなど流派の形成が見られ、読経道が顕在化していくこと等が以下の史料を駆使して時系列に解説された。(①〈東大寺要録一供養章第3「化人講師事」〉、②〈続日本紀一養老4・12・25〉、③〈大日本古文書24一天平8年「〇氏名關優婆塞貢進解」〉、④〈同書2一天平14・11・15類載〉、⑤〈同書8一天平14・12・9「〇優婆塞貢進解」〉、⑥〈同書2一天平14・11・23「〇優婆塞貢進解」〉、⑦〈同書8一天平14・月・日闕(11月15日)「〇優婆夷貢進解」〉、⑧〈同書8一天平17・8・1類収「〇優婆塞貢進文案」〉、⑨〈政治要略28一年中行事12月上(御仏名)項〉、⑩『枕草子』33・35段、⑪～〈玉葉 承安3・5・27、同4・5・27、安元3・2・14、同7・7、同8、同8・10、治承4・10・18、建久2・10・14、同閏12・5、同14、同18条)〉。

2番目の公開講演、北京中央音楽学院教授の袁静芳氏による「歴史ある北京智化寺京音楽」に先立ち、袁氏より北京中

央音楽学院創立70周年記念の冊子と袁氏の著書が本学会に寄贈された。講演は袁氏の中国語によるそれを尾高暁子氏が通訳する形式で行われた。こちらは事前に配布された講演資料に添って行われ、文字資料が手元にあったから通訳を介した不便は概ねなかったが、午前中のプレセッションの状況から、一般会員には中国文化や中国仏教に関する知識が充分とは見えなかったから、智化寺の盛衰についてどれだけ理解されたかは疑問である。が、ともあれ、北京東南部に15C中葉に宦官王振が建立した私寺に伝承された音楽が「京音楽」と称されるに至る経緯が、1. 概観、2. 智化寺京音楽の楽譜と曲目(楽譜と記譜方式の特徴・楽譜の記載曲目)、3. 智化寺京音楽の楽器、楽隊編成と宮調(智化寺京音楽の楽器・智化寺京音楽の楽隊・智化寺京音楽の宮調)、4. 智化寺京音楽の中堂套曲に分けて解説され、最後は只曲「小華嚴」の演奏を聞きながら終えることとなった。

午後後半は、公演【日蓮宗声明と法要式】で、本山妙本寺貫首早水日秀氏の解説に加えて、日蓮宗の法要式が挙行された。この解説及び声明も周到的な発表メモを配布されての見聞であったから、大概はこれによっていただきたい。天台声明の流れを汲む日蓮宗声明の近代の『宗定日蓮宗法要式』制定に至るまでと、その様式がよくわかる公演で木鉦の音が耳に鮮やかであった。

磯 水絵



いずれも、日蓮宗声明と法要式

◇田邊尚雄賞授賞式・懇親会

第27回田邊尚雄賞は、Hugh de Ferranti “The Last Biwa Singer : A Blind Musician in History, Imagination and Performance”と、塚原康子『明治国家と雅楽—伝統の近代化／国楽の創成』の2冊であった。まず、選考委員の高桑いづみ氏から受賞理由が述べられ、各受賞者の挨拶となった。Hugh de Ferranti氏は体調不良ほかの事情で帰国中のため、日本伝統文化振興財団の藤本草氏が挨拶文を代読した。各位へ謝意とともに、本書に至る研究の軌跡や、この受賞が英語圏における研究者たちへの橋渡しになることが述べられた。塚原氏は2度目の田邊賞受賞で、本書は10年前の科研の報告書を再構成した力作である。学生時代より温めてきたテーマで、当時諸先生から頂戴した言葉が今も活かしていること、いっぽうで楽家史料の調査が年々難しくなっていると述べられ、後進研究者への貴重なメッセージとなった。

懇親会は同学内の学生食堂にて、高桑いづみ・藤田隆則両氏の司会により和やかに行われた。歓談の合間には、中国人招待者各位の紹介、田邊賞受賞者塚原氏には巻末付表を手伝った森田都紀氏から、Hugh de Ferranti氏には薦田治子・徳丸吉彦両氏から心温まる祝辞が贈られた。また、芸芸大の書道専攻生による書と森田敬子氏による箏曲生演奏のコラボレーションもあり、会場は大いに盛り上がった。最後に、次年度大会開催校、京都教育大学の田中多佳子氏と垣内幸夫氏より抱負が述べられた。近藤静乃

第2日(11月14日)

◇研究発表1A(司会:谷正人)

研究発表1Aは、研究対象やアプローチは異なりながら、ともに音階や旋法に対する関心を共有する、三つの研究発表から構成されていた。

クレズマー音楽における「旋法」とモーダル・ハーモニー

森真理子

森真理子氏はクレズマーの音楽について、旋法とモーダル・ハーモニーに注目して論じた。発表では生演奏によるデモンストレーションを交えながら、先行研究の分析方法が丁寧に検証された。一方でやや残念に感じたのは、オリジナルな分析プロセスへの言及が相対的に少なく、簡潔に結果のみが示されたことである。そのために「セカンダリー・トニックとしてのIV度の重要性」「IV度への転調」といった森氏の発見が、クレズマー音楽研究の中でどのような意味をもちうるのかが、この分野に精通していない報告者には少し理解しづらかった。音組織の細部を掘り起こし、そのしくみを探

る研究は、音楽を文化としてみる研究が優勢な現在も、依然として民族音楽学の重要で基本的な研究課題であると思うが、音楽分析がより普遍的な価値を持つためには、分析の手法や概念自体に関する客観的な考察が不可欠であると思う。とはいえ若い研究者が積極的に発表する姿勢に声援を送りたい。

増野亜子

アラブ音楽における旋法の名称:感性による分類の大系

飯野りさ

一方飯野氏は旋法をめぐる概念に関する考察を行った。アラブの音文化を広く視野に置きながら、アラブ音楽において旋法の名称が、時に音名やテトラコード名と同じ名称で呼ばれるという現象がもつ意味が、〈内包〉と〈外延〉という概念によって考察された。旋法・テトラコード・旋律型など多様な形で〈外延〉に現れる現象はすべて、〈ラースト〉といった固有の名称でしか言い表せないような感覚を根幹に〈内包〉している。異なる位相において同一の呼称を用いることで、相互に関連したある種のひびきや情緒の記憶が連鎖して呼び起こされるという指摘は、アラブ地域に限らず、また音楽にも限らず、たとえば音楽と他の芸術分野とのつながりを考える上でも興味深い。フロアとの質疑応答からは、同様に体系化された旋法概念をもつインド古典音楽では、〈内包〉される情緒概念がアラブより理論的に整理分類されているようだ、といったことも浮かび上がってきた。増野亜子

十七世紀のミティラー地方の宮廷歌謡の音階構造

—『ラーガタランギー』に基づく考察

丸山洋司

丸山氏の発表では、音階構造は文献上に残された過去の音楽に関する記述と、現在の音楽実践をつなぐ手掛かりとして用いられた。現代の演奏(録音)の分析結果と、17世紀の文献の記述を照合する作業から、当時の北インド宮廷音楽と現行のミティラー地方の儀礼歌の音楽伝統との関係が示唆された。これまで発表者が蓄積してきたフィールドワークで収集された資料と、本発表で示された文献学的アプローチを相補的に用いることによって、ミティラーの音楽文化を立体的に理解する試みは、スリリングで興味深いものであるが、同時にまだ多くの克服すべき課題を含んでいる。たとえばフロアから指摘された、史料自体に関する文献学的な検証や分析は、重要(かつ困難が予想される)課題であろう。発表者自身が冒頭で述べたように、この発表は深い森に入っていく最初のステップであり、これからの調査を通してどのような風景が見えてくることになるのか、楽しみである。増野亜子

◇研究発表1B(司会:高松晃子)

1980年代以降の南アジア音楽受容史

—「私心」による交流とその未来

小日向英俊

音楽受容の歴史と現在を概観する研究。発表者が独自に作った、1)マクロモデル(国家単位の接触)、2)ミクロモデル1(宗教団体など共同体の接触)、3)ミクロモデル2(個人間の接触)、4)ネットワークモデル(以上3つが複雑に接触し合う)、といった4枠が示された。前者2つは「公的受容」、後者2つは「私的受容」と名付けられる。発表では、前者から後者へと比重がうつる受容史が、受容の主体、受容の場の変遷などを中心に示された。そして現在、「私的受容」の場が、高い質を維持しているのに、公的広がりを与えられず「閉じて」いることが問題とされた。

これは、音楽受容にとって大切なポイントであると、評者には思われた。「公私」の区別はたんに受容主体の大きさの違いではあるまい。「公立」対「私立」のように、音楽伝承においては「私的」空間が「公的」とは対照的な意義をもつこともある。そのあたりにも可能性を見出しつつ、受容モデルのさらなる展開を期待したい。

藤田隆則

わらべうたの歌詞における多元的特徴をめぐって

—中国チベット自治区と新疆ウイグル自治区との事例比較から—

内堀明子

チベット族の調査地では、日常においては漢語との接触があまりないにもかかわらず、わらべうたの歌詞に漢語が混ざっていることが多い。発表者はその理由を、チベット語と漢語の両者において、音韻、声調、韻律が類似している点に求める。この特徴をより鮮明にすべく、発表者のもう1つの調査地、ウイグル族のわらべうたが紹介される。こちらは日常生活において漢語の浸透がより大きい社会である。にもかかわらず、わらべうたへの漢語の浸透度は小さい。理由は、チベットの場合と反対。つまり言語の音声的特徴の類似性の低さにある。

そもそも他言語の摂取は、韻律特徴の類似が前提になるのか。この点を理論的にも深めつつ、「言語」とはモードの異なる、わらべ「歌」の歌詞の多元的特徴を進めてもらいたい。山本宏子氏から「歌がチベット外部から持ち込まれた可能性はないのか」という質問があった。生成論の前に、社会的環境要因を考えられないか、という問いである。漢語の使用状況から考えて当然の問いであろう。

藤田隆則

娯楽としての佐渡の文弥人形芝居を考察する

—佐渡の人々への芸能への関わり方を通じて

藪田郁

人形芝居は全国各地に残り、その伝承が網羅的に調べられてはきたが、1地域の中での伝承実態、地域内での役割や価値の研究は多くないと、発表者は指摘する。発表者は人形芝居を、佐渡の芸能伝承全体の中に置いて概観する。佐渡では、能や鬼太鼓が伝承される。こちらにおいて人々は、自らが担い手(演奏者)となっただけで、それに対し人形芝居では、限られた人が担い手(「遣う」人)としてかかわり、多くの人々は観客(「見る」人)という立場でかかわってきた。人形芝居はその意味で「保存活動ではなく娯楽」という枠組の中で享受されたと、発表者は指摘する。

本発表は「人形芝居はなぜ面白いのか、それは何なのか」という本論に入る前の、よいプロローグと思われた。廣井栄子氏より「発表者が(通常使用される「きく」ではなく)「みる」という用語をあえて目を向けたのはどういう意図か」という問いが寄せられた。本論に向かうための、面白い問いかけであると、評者には感じられた。

藤田隆則

◇研究発表2A(司会:谷口文和)

パフォーマンスからミュージッキングへ

—米国黒人教会における歌唱、ダンス、トランスの混合的実践から—

野澤豊一

この発表では、アメリカの黒人ペンテコステ派教会でのフィールドワーク映像をもとに、礼拝の場面で起こる様々な行動が紹介され、分析の方法が提供された。聖歌隊の歌や、牧師の説法に続く信者たちの行動は、一見、「歌唱、ダンス、トランスのカオス」に見えるのだが、あるパターンがあると考える。もちろん、この行動は「音楽作品」やその演奏以前の音楽行動であり、パフォーマンスというよりは身体によるコミュニケーションとみるのが妥当である。そのための理解と分析に有効な概念として、Blacking(1978;1995)の「人間の音楽性の生物学的基盤」という考えに含まれる「身体的コミュニケーション」と、Christopher Small(1998)が造語して概念化した「ミュージッキング」つまり、行為・活動であり、「出来事」や「過程」として音楽実践を考える視座を得るための概念を応用した。ジャズなどの即興性と共通点があり、類似した研究アプローチが可能である。質疑応答で、関連がありそうな神楽のトランスと、インド音楽についてのコメントおよび質問が出た。

時田アリソン

琉球古典音楽の「姿」—演奏の身体化と門下会意識

マツト・ギラン

演奏者の身体の動きは近年の音楽学において重要テーマのひとつである。琉球古典音楽は非常に緩やかなテンポの曲が多く、記憶も合奏も難しいので、身体の動きを通じて音を合わせる工夫が必要である。伝統的な言い伝え、伝承者や弟子のビデオ映像、インタビューデータを利用し、身体の動きを考察した結果、身体の動きは旋律を作り出す役割をもち、旋律やリズムを伝えるような役割もあることがわかった。先生が旋律を伝えるために、じっさいに頭の動きを強調し、さらに言葉で指摘した例がある。弟子は手の動きがない曲は合わせにくいという。さらに、手の動きから流派内の門下会や系統がわかるので、それが門下会のアイデンティティを表現していることが指摘された。日本の伝統音楽の他のジャンルでも、口伝だけではなく、「体伝」という見方を当てはめたら有意義だろう。これに対し、長唄でも三味線の手の動きを合わせることは意識されている、など共感を寄せたコメントがあった。

時田アリソン

日本邦楽器の演奏における身体表現—箏曲を中心に—

毛Y (マオ ヤ)

日本の邦楽器演奏者はなぜ自分の感情を抑えながら演奏するのか、という素朴な疑問が、この発表の出発点である。中国人の西洋音楽・伝統音楽、日本人の伝統音楽・現代邦楽の演奏の映像を比較し、有名な現代箏曲演奏家3人のインタビューデータを基に、身体を動かさないようにして演奏する古典と違い、現代曲では身体を動かさないと、求められる音色が出なかつたり、洋楽器との共演でリズム、音、息が合わなかつたりすること、二十絃などの新しい楽器では自然に身体が動く、ということを明らかにした。つまり、身体を動かすのは、日本の現代邦楽演奏の場合よりよい音を出すためであるが、一方中国の場合は演奏者の感情を伝えるためであると指摘する。中国の身体表現は昔からのものか、西洋音楽の影響があるのでは、という質問に対し、表情を抑えた日本の演奏もそれほど古くないだろうとして、笑顔で演奏している写真を昔の雑誌で見た、というインタビューでの話を披露した。伝統音楽近代化の一面として意義ある問題提起で、特に中国との比較の視点は興味深い。

時田アリソン

◇研究発表2B (司会：早稲田みな子)

沖繩移民一世の戦前の芸能実践にみられる競争するという発想

栗山新也

栗山氏の発表は、戦前の沖繩系移民社会における、芸能の「競争」という現象に注目した報告である。1933年頃のサイパンのエイサーコンクールと、1940年代のハワイでの琉球芸能共演大会の事例が紹介された。特に南洋の沖繩系人の活動についてはほとんど資料や報告がなく、貴重な紹介となった。栗山氏の論点は、初期の移民が従事したプランテーション農場での労務管理、すなわち、労働者を出身地域に分けて対抗させる(=分断させ連帯させない)という体制の下、芸能においても各グループが対抗する発想が生まれたという新しい観点を持ち込み「芸能の競争」を読み解こうとする意欲的なものである。確かにこれは一つの大きな要因であるように思われるが、もともと沖繩内部にも、字ごとに芝居や踊りを競う習慣があり、報告者には、そうした伝統的な習慣との「相乗効果」によって、競争が「加速された」ように思われた。なお、今回は紹介されている資料が断片的であったが、より網羅的な資料を提示し、丹念な読み取りを行うと、なお一層緻密な論証が組み立てられる可能性が感じられた。寺内直子

戦前のハワイにおける「琉球盆踊」考

遠藤美奈

遠藤氏の発表は、1900年代前半のハワイ・マウイ島における「琉球盆踊」の実践の報告である。氏によると、マウイ島においては、1921年頃から「琉球盆踊」が行われ、1932年に臨済宗ハワイ開教院が開設された後、同所で盆踊りが催されているという。また、他の移民先と同様、マウイでもヤマト系移民との軋轢が認められるが、「一等の日本人」として、沖繩系人の盆踊が、日系社会において、むしろヤマトのそれよりも「整然とした」「立派な」ものである、という評価を獲得する過程が、『馬哇新聞』の評論記事や舞踊競演大会の記録によって示された。欲を言えば、ハワイ諸島全体でのマウイの位置づけの言及があれば、さらに充実した発表となったと思われる。前述の栗山氏の事例は沖繩系人の中の「競争」を扱ったもの、遠藤氏の事例はヤマトウンチュとの関係における「競演」の例だが、両者の発表を通じて、各集団の芸能実践者たちが、他に対して競争心を持ち、芸を磨くことは、何らかの契機があれば起こる、ある程度普遍的な現象であるとして、その契機を与える者、すなわち、コンクールや芸能大会の主催者、興行主に関する考察も今後必要になるのではないかと思われた。

寺内直子

グルジア系トルコ国民の音楽活動と、アイデンティティの多面性・流動性

松本奈緒子

松本氏の発表は、トルコ国内の少数民族グルジア人の、音楽活動を通じたアイデンティティについて考察したものである。日本ではあまり知られていない地域の少数民族の事例であったためか、発表の大部分がトルコ国内のグルジア人の居住地域、歴史的背景、トルコ民族との関係などに関する解説に費やされ、音楽活動の具体的内容の説明に十分な時間が割かれなかったのが残念であった。氏の発表で具体的にとり上げられたのは、アフメト・オズカンとイベリヤ・オズカンという2人の文化活動家の興味深い事例で、特にイベリヤは、グルジア音楽の実践者、プロモーターとして活動しており、トルコ政府のグルジア語の言語統制が緩和されるにつれて、グルジア語の歌や合唱団の活動、録音を活発化させたことが示された。しかしながら、イベリヤの音楽活動のどのような側面や思想が、タイトルにある「アイデンティティ」の「多面性」「流動性」に当たるのかに今ひとつ明確な説明がなかった。実際の音楽の例や、イベリヤの発言などが具体的に示されれば、もう少し聴衆の理解が深まったかもしれない。

寺内直子

◇研究発表3A(司会:竹内有一)

黒川能上座における謡本の所蔵状況とその変遷

柴田真希

発表の主題は黒川能の上座における謡本の所蔵状況と変遷を明らかにすることである。先行研究では「観世流や宝生流の本を訂正して用いている」(横道万里雄)とされてきたが、柴田氏は近年、現地調査を行って情報を更新した。氏は次の謡本を3種に分ける。①師匠、あるいは自身による手書きのもの ②市販のもの ③黒川内部で作成されたもの。①はさらに成人用、子供用、打楽器奏者のものに分かれ、②には進藤流、観世流がある。③は1970年代から現在までひき続けている事業である。役者はこれらの謡本の長所と短所を補いつつ選択・作成している。

氏の発表で特徴的だと私が感じたのは、謡本の分類である。作成者によって分類することで、黒川との関係、入手の方法が明らかになる。中央の流儀との遠近や記譜法に気を取られる以前に、黒川の役者の視点から3種に大別する氏の分類法に学ぶところが多かった。

奥山けい子

宮菌節正本にみられる阿波屋一統の出版活動について

黒川真理恵

発表は宮菌節正本を手がかりとして、上方の版元・阿波屋

を音曲物の版元集団として注目し、その活動を解明するものである。阿波屋の屋号を名のる版元は大坂の阿波屋平八・阿波屋太三郎・阿波屋平七・阿波屋文蔵、京都の阿波屋七兵衛・阿波屋定次郎などがあるが、これらの版元の出版活動には、宮菌節の太夫・宮菌鸞鳳軒との提携関係、商標「森」の使用、同一の板木の使用、販売網など、独自のネットワークがあると氏は指摘した。

従来『大坂本屋仲間記録』を活用した研究はなく、この発表はそれを使って音楽芸能の出版を押さえた基礎的研究である、と司会の竹内有一氏が述べた。江戸時代の出版集団と音楽家の姿と経済的背景を生き生きと照らし出す手堅い研究であり、図や表も含めて、わかりやすい発表であった。

奥山けい子

芝居の演奏家と吉原の男芸者の兼業

—三代目常磐津造酒太夫を中心に—

前原恵美

前原氏は、「吉原細見」に掲載され、芝居出勤記録もある三代目常磐津造酒太夫をとりあげ、彼の襲名・改名を検証した。その結果、淀太夫を名のる時代はほぼ活動せず、出雲太夫を襲名後は寛政2年11月が芝居の初出勤でその後吉原を中心に活動、さらに両分野で活動し、造酒太夫襲名後は吉原で活躍して文政1年まで活動した、と推論した。そして「吉原細見」が演奏家研究の傍証資料として有用であり、芝居出勤の枠をこえて吉原を含む演奏活動をとらえ、演奏家の実態に近づけると述べた。

これまで文学や風俗研究に活用されてきた「吉原細見」を、氏は音楽史料として位置づけ、音楽のプロである芸者の記述に注目して研究を進めてきた。今回の発表は、一人の演奏家を通して江戸時代の常磐津の歴史を明らかにしたものである。今後さらに大きく精細な成果が予測される。

奥山けい子

ケンブリッジ大学所蔵の菊亭家旧蔵雅楽関係資料に関する調査研究

太田暁子、近藤静乃

鎌倉後期の西園寺実兼の子・兼季を祖とする今出川家(菊亭家)は琵琶の演奏を家職とし、音楽をもって朝廷に仕えてきた。菊亭家旧蔵の雅楽関係資料が現在ケンブリッジ大学図書館に所蔵される。太田氏と近藤氏、遠藤徹氏はこれを現地で調査し、購入のいきさつを示す書簡などの整理も行った。これらの資料全体を紹介するのが今回の発表である。それによると Laurence Picken はその一部を1969—70年に購入し、生前にケンブリッジ大学図書館に寄託した。ほかに東博や京都大学、専修大学が菊亭家旧蔵書を所蔵するが、ケンブリッジ資料はほとんどが楽譜で、江戸中期の資料が多く、竜笛譜

が多い。

基礎的調査による発表であり、雅楽資料研究であるだけでなく、20世紀における雅楽資料の移転の研究でもある。今後の発表も大いに期待される。

奥山けい子

研究発表3B(司会:三島暁子)

『體源鈔』に見える「姿」「心」論

一巻十一における歌論書引用部分を中心として一

比嘉舞

発表者体調不良のため、発表は取りやめとなった。

清代儒学における楽の働き—凌廷堪の學術観と燕楽研究

田中有紀

本発表は、蔡元定や朱載堉などの雅楽の楽律研究に対して燕楽研究を行った、凌廷堪についてである。凌廷堪は、従来の楽律研究が実用不能であるとし、俗楽である燕楽を研究して、唐宋燕楽の起源が「三代の法物」ではない亀茲伝来の琵琶であることを重視したものである。また、理に代わるべき礼という「以礼代理」の思想に基づきながらも理を完全に否定せず、普遍的規律としての理が重要であるとする學術観をもっていた。そこから、黄鐘から生じた音楽は、古代の聖人が制作した楽、西域由来の唐宋燕楽、軽視されていた琵琶、全てに同じ理が宿っているという考えに至り、さらには中国の學術と西洋の學術は一致するものであるとのことである。琵琶から燕楽に注目したのかというフロアからの質問には、朱載堉とは異なり、音楽史を見ていく過程で琵琶に行き着き研究したのではないかと回答がなされた。(大会プログラムでは「凌」廷堪となっていたが、「凌」廷堪の誤りである。)

清水淑子

平安初期における奉獻儀礼の奏楽と近衛府

一場の論理から奏楽の脈絡を読む

平間充子

本発表は、天皇へ物品を奉る奉獻儀礼とその返礼としての天皇からの宴が儀礼化された、天皇と臣下の隷属的關係を象徴する「旬儀」と呼ばれる饗宴儀礼に関して、記録史料からの具体的な事例から奏楽の必要性や奏楽と近衛府について考察したものである。この旬儀の場合は共食を通して天皇と臣下の一体化を強める場であったが、律令に規定されていない儀礼であり、そのため奏楽は律令官司の雅楽寮ではなく、律令に基づかない官司である近衛府が担当する慣習だったことが考えられる。さらに奉獻儀礼の主体が個人から官司に変化したことにより、奉獻を行い、奏楽も行える近衛府が旬儀を行う官司として有力だったこと、また競馬の負態としての奏楽

が旬儀に取り入れられた可能性があげられるとのことである。フロアから発された天皇と楽の關係についての質問には、芸術として好んだ一方で、臣下との關係を強めるアイテムとして楽を利用したとの回答がなされた。

清水淑子

東京芸大図書館蔵「中樞府重修宴契会図」にみる十六世紀朝鮮の宴礼楽舞

植村幸生

本発表は、東京芸術大学附属図書館所蔵の絵画「中樞府重修宴契会図」についての資料紹介である。この資料は1885年に明楽を伝授する鉅鹿祐五郎より、音楽取調所が明楽関連資料の一つとして購入したものであり、両班官僚14名の宴礼の様子を描いた「契会図」と呼ばれる記録画で、上段に標題と賛詩、中段に列席者13名、楽器を奏す楽工10名、舞人を含む妓女15名、下段に列席者名等が描かれている。この資料から、1588年頃、朝鮮の宮廷で行われた宴を公的機関である図画署の画工が描いたものであり、楽工の人数から『楽学軌範』に規定されている比較的小規模の「二等賜楽」であることが読み取れるとのことである。またフロアから以前調査した際に所在不明であったとの意見があり、これと関連し従来その存在が知られなかった要因として、明楽関連のものと分類され、また楽器とは別に図書館蔵になっていたことが考えられるとの回答があった。

清水淑子

◇研究発表3C(司会:権藤敦子)

植民地朝鮮における唱歌・音楽教育の実態—教員による雑誌記事をめぐって—

金志善

教員が『文教の朝鮮』と『朝鮮の教育研究』に執筆した記事から考察。その中から教員の活動内容、『初等唱歌』編纂の趣旨、唱歌教育の実態に関する顕著な記事を抽出して説明。以下質疑応答。①『初等唱歌』は朝鮮の「情緒」を考慮とあるが、情緒とは朝鮮独特のリズムなどが反映された意かについて、「情緒の基準は曖昧で、曲内容の言及は本発表では対象外。朝鮮の感情の意に限定」とした。②「民俗本能が無力になるまでに」とは、朝鮮民族の自覚を促すものか日本に同化させようとしたものかについては、「植民地とは、基本的には日本風にさせること」とした。③「教員の努力、苦悩により教育が改良・発展していく過程を確認した」とあるが、京城の音楽教員の影響力はどこまで教育に浸透したかには、「京城師範学校は朝鮮総督府直系であり、その影響は最強であった」と説明。④朝鮮側の反発記事の有無については、「朝鮮総督府との繋がりがあり、反発記事は難しい」とした。蒲生美津子

近代日本における「仏教音楽」の成立と声明研究

新堀敏乃

1880～1930年代の声明研究活動を音楽学界と声明界の両面から概観。1880年代、音楽学界では声明を音楽と捉える認識が生まれ、声明界では声明の譜本や解説書を刊行、声明の保存復興の動きがあった。20世紀には声明を日本音楽の一種目と捉え、音楽学界では譜の蒐集・展覧、録音・聴取・研究、30年代前後には、概論書で一章を設けて言及され、多種目の源流論、多種目への影響論があった。声明界では展覧目録作成、声明学の提唱、科学的歴史的研究、文献批判、詳細な五線譜化、音楽構造分析がなされ、音楽学界への接近交流が見られた。①研究対象の声明と、御詠歌仏教唱歌等を含めた仏教音楽の定義と研究活動史について②僧侶には、宗教者として・研究者として・近年では音楽家としての活動がある。声明研究に対する僧侶の価値観について③『音楽取調成績申報書』の声明の位置づけと音楽との関係について④声明界は宗派ごとに見る必要がある等の指摘があった。 蒲生美津子

大正期の宮内省改革にみる楽部

中村真由子

発表では副題を削除。皇太子裕仁の欧州外遊、武井守成楽部長の就任と活動、吹奏楽を取りやめて管絃楽の多用、楽部から2名の留学生派遣の事例を示し、大正時代の楽部の動向を新聞記事や公文書資料等で説明した。①吹奏楽の伝習奏楽を外したのは音楽的質を高める為かの質問に、武井が楽部長就任時に予算を削減し管絃楽に絞って質を高めることを論じた、とした。②武井が楽部長の職にありながら外で活動している。職務としての勤務形態と個人としての音楽活動についての質問に対し、詳細は不明とした。③記事にある昭和天皇が音楽を好んだ事は不聞で、この場合は随行者が問題になる。報告者②安倍季巖の話では、武井は稽古所には毎日出勤せず、用のある時のみ来たという。職員録を通覧すると、部長・副部長職は、古くは太政官要職者くだって式部官が楽部・御歌所・掌典などを兼務することが多く、外部で作歌活動教授活動を行うなどの例が頻出することを付言する。 蒲生美津子

海軍軍楽師・吉本光蔵のベルリン留学日記

塚原康子、平高典子

日記の所蔵者と形態、吉本の経歴、ドイツ滞在の日記2冊から読み取れる軍・音楽関係者・エッケルトらとの交流、ベルリン音楽院での音楽教育軍楽教育・音楽会鑑賞・踏舞会等の音楽体験、楽器購入やパリ万博視察、烏森芸妓らの公演、奥宮代理人への楽譜貸与、シュトゥンプ、ホルンボステルとの接点等について言及。①「吉本に川上…を仲介か」は日記の記述かに対し、行き来は確認できるが「玉井喜作が仲介」

は発表者平高の推測とした。②吉本はドイツから楽譜を持ち帰ったかの質問に、吉本の出納簿にはピアノ譜購入の記載があるが遺族側には無い。海軍軍楽隊の資料的状态は九州の陸軍とは違い、戦後舞鶴にあったものは京都市立芸大に入るが全貌が分かる状態ではなく、吉本購入楽譜の存在は不明とした。③「海軍蔵版として出版」した五線楽譜の確認については探索中とした。1900年前後の日欧間の音楽情報交流を伝える好資料の紹介、豊富な情報提供と資料解釈であった。 蒲生美津子

◇研究発表4A(司会: 薦田治子)

初期の胡弓について

—17世紀の文字資料と画像資料から

加納マリ

加納氏の発表は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの共同研究「胡弓の源流と受容・東西交渉の視点を中心に」(2008年)の成果から、17世紀の文字資料(35点)と画像資料(50点)によって初期の胡弓の様相を明らかにしようというもので、屏風絵、船絵馬等の映像も多数紹介された。これらの資料から、胡弓は丸い胴から角型へ変化し、はじめは短かった弓が長くなり、さらに中子先を長くして楽器を廻しながら演奏するようになり、弓の持ち方も上手持ちから下手持ちへ変化したと推測される。文字表記も「小弓」「こきょう」「鼓弓」「胡弓」と徐々に変わった。ただし17世紀はまだその変化の過渡期にあり、様々な形の胡弓が混在する時代であった事が絵画資料からも読み取れるという。質疑応答では胡弓の駒について質問が出たが、駒の形や位置については弓の長さや持ち方などとも関係があり、今後の課題と述べられた。今後のさらなる研究に期待したい。

吉野雪子

崑曲^{みんこうてき}と孔笛の音階のはたらきを論ず

いしみのぞむ

いしみ氏の発表は、中国の古典演劇である崑曲に用いられる崑曲^{こんきょくてき}笛の音階、音律に関する研究であった。崑曲笛は六つの指孔が等間隔に並んだ笛(勻孔笛)で、吹孔から遠い箇所(ファ)または(シ)をおき、その音を(ファ)と(ファ#)の間のような音にして前後の音程間隔を曖昧にすることで、様々な曲の演奏に対応できるように作られているという。文献上にあらわれる中国の勻孔笛に関する記述を検証するとともに、実際に機械的に笛に風を送り音律をはかる吹奏実験を行った結果もあわせて発表された。機械的な吹奏実験では、人間による演奏の場合との偏差を修正した上で、中国の古い笛などとの細かい比較が行われた。フロアからのコメントとして、漢民族文化圏に限らずフォークロアまで含めて考えると、いろいろな旋法の音楽に対応できるこのような勻孔笛がむしろ普遍的な形と言えるのでは

ないかという意見が出た。

吉野雪子

◇研究発表4B(司会:牧野英一郎)

研究発表4のB会場には、音や音楽等から人間が受けとめる影響を、実験で測定し考察する手法を用いた研究が並んだ。他分野の研究者との共同研究ないし研究協力を活用している点も共通する。本学会では珍しい部類に属するが、新しい方向性をもつ研究といえる。

超音波の生理的・心理的影響と音楽文化への関与性について

田村治美

はじめの田村治美氏の発表では、日本の伝統楽器に含まれる超音波の影響が扱われた。超音波は撥弦楽器や打楽器のほか、能管のヒシギや尺八のムラ息にも含まれる。実験から、伝統楽器の超音波が脳のα波を増加させ鎮静感を高め、音体験の有無により感度や脳内の反応部位が違ふことが報告され、超音波効果が伝統文化に関与した可能性と、その影響を組み込んだ研究モデルが提唱された。「聞こえない音」である超音波研究の有用性は十分認識した上で、会場からは、伝統楽器の多様性や歴史性をふまえて実験に用いる楽器(たとえば今回は扱われなかった雅楽器)や被験者の選択を拡大し、さらに比較検証を積み重ねる必要性と、それに基づく一層着実に精密な議論の展開を期待する声が多く寄せられた。塚原康子

音楽受容者研究における「音楽スコア」作成の意義

一『曾根崎心中』を事例に一

笠井津加佐

笠井津加佐氏の発表は、音楽の受容者研究のために作成した「音楽スコア」の意義を問うものであった。「音楽スコア」は、総合芸術である音楽の言葉・音・動きを時系列に即して総覧できる、五線譜と舞踊譜を合成した資料である。受容者の「感動」を数量化したとしても、一体となった言葉・音・動きのどれに主に反応した結果であるかを特定するのは困難だが、実験で得られた感動量の評定を「音楽スコア」と照合すると、それが一目瞭然となる。音楽にはじめて接する大学生10名(非熟達者)の実験結果からは、音声刺激より映像刺激に強く反応している実態などが読みとれるという。会場から、熟達者との違い、一回性をもつ公演事例に基づくスコアから得た知見を一般化する危険性などが指摘されたが、「音楽スコア」作成の多大な労力に見合う効果的な実験・考察法をさらに案出して応用力を高め、研究上の有用性を周知させることが先決かもしれない。今後期待したい。

塚原康子

◇映像発表

映像発表は大会初の試みであった。9時から16時20分の間、3人の発表者による映像がループ形式で5回上映された。途中、午前中に小日向英俊氏、午後には福岡まどか・岡田恵美各氏との質疑応答時間が10分間ずつ設けられた。

福岡氏の映像「ジェンダーを超える踊り手:インドネシアの女形舞踊家ディディ・ニニ・トウォの上演」は、この舞踊家が自身の創作舞踊の上演のために楽屋で準備をする場面と、実際の上演という2部構成だった。「化粧をする」、「衣装をつける」など、準備の諸段階が文字で画面に表示されるほか特に説明はなく、様々な疑問を抱きつつ鑑賞することになったが、上映後の質疑応答により、彼がジャワの伝統舞踊から出発した舞踊家で、中国系の父をもつこと、アジアの他の国の舞踊から影響を受けてクロス・ジェンダーにこだわるようになったことなどを知ることができた。

小日向氏の「北インド音楽様式ドゥルパドの技法」は、現在は演奏機会が減少してしまったこの古い音楽様式を学術的・教育的視点から紹介するもので、解説とデモンストレーション、続いて実際の演奏という構成だった。研究者かつ演奏家であるRitwik Sanyal氏もつばら語り手・歌い手として登場し、そこに文字による解説、字幕、地図、楽譜等、鑑賞者の理解を助ける様々な工夫が付加されていた。文化の担い手を中心に据えた、学術資料および教育手段として価値の高い映像であった。また演奏そのものをじっくり(約20分間)鑑賞できるという意味で、演奏記録としても貴重な映像であった。

岡田氏の「コルカタのハルモニウム産業にみる都市性」は、人々の語り、デモンストレーション、演奏を含む様々な現地映像に、ナレーション、図、補足画像、グラフ、字幕、BGMなどを加えたもので、テレビ番組さながらに仕上がっていた。内容は、コルカタにおけるハルモニウムの受容の歴史、コルカタ製ハルモニウムの特徴、製作過程、奏者という構成をとり、コルカタを中心としつつ、インドのハルモニウムの歴史、発展、現状も概観できるようになっていた。現地調査ならではの詳細な情報が、映像メディアの利点を活かしてわかりやすく提示され、学術的かつ教育的に大いに貢献し得る映像だった。

福岡氏の映像が、現地録画の抜粋による記録映像的なものであったのに対し、小日向氏の映像は文化の担い手、岡田氏の映像は自身の研究者としての立場からの語りを中心とする啓蒙的なものだった。それぞれ興味深い内容であったが、記

録の提示を主とする映像においては、質疑応答の機会がもつと設けられるとよかったのではないだろうか。あるいは、発表者自身が解説を加えながら上映するなど、発表の形式に柔軟性をもたせてもよいかもしれない。

今回は三つの映像を一つのDVDにまとめたものが上映されたが、編集過程でアスペクト比が変更され、字幕の一部が表示されないという問題が生じた。映像募集時にフォーマットの規定をすべきだろう。また、質問用紙やアンケート用紙の配布など、今後、より効率的な質疑応答、製作者へのフィードバックの仕組みが工夫されるとよいと思う。早稲田みな子

ICTM (国際伝統音楽学会) に関するお知らせ

1. 第2回 ICTM 東アジア音楽研究会 (MEA) の報告

ICTM 東アジア音楽研究会 (Study Group for Musics of East Asia = MEA) の第2回大会が、去る2010年8月24日～26日にAcademy of Korean Studies (於:韓国、ソナム市)で行われました。東アジア各国に加え、アメリカ合衆国、イギリス、フランス、オーストラリア、カナダからも参加者が集まり、その数は総勢112名に達したと報告されました。初日はバンケットと同校の大学院生による韓国音楽演奏会、続く2日間では18のセッションにおいて55の研究発表が行われ、ICTM内の研究会としてはかなり規模の大きい会となりました。海外在住者も含め、日本人研究者の発表は3つと少なく、少し残念でした。中国語圏からの発表者は台湾、香港出身者が圧倒的に多く、学会公用語としての英語が大陸側中国人(および日本人)研究者のハードルになっているように感じました。今回プログラム委員長を務めた Chinese University of Hong Kong (CUHK) の Tsai Tsanhuang 氏によると、香港では学生による研究発表会を英語で行うということを実践しているそうです。日本でも今後そのような機会を積極的に設けることで、国際的な場における研究発表への自信を養うことができるのではないのでしょうか。25日の夜には、伽耶琴(カヤグム)の第一人者であり、また作曲家でもある Hwang Byungki 氏によるレクチャーコンサートが行われました。曲目はすべて Hwang 氏の作曲または編曲によるもので、伽耶琴の独奏曲、四面の伽耶琴による曲(西洋芸術音楽の編曲を含む)、および玄琴(コムンゴ)による曲が披露されました。

26日の総会では、新理事会役員が発表されました。本大会で Wang Yingfen 氏(台湾)の会長としての任期が終了し、新会長に前副会長の Larry Witzleben 氏(アメリカ合衆国)が着任しました。また、本大会で3名の理事、Sheen Dae-Cheol (韓国)、Xiao Mei (中国)、Um Hae-kyung (英国)各氏が任期満了を迎え、新たに選出された4名、Frederic

Lau (アメリカ合衆国)、Li Mei (中国)、寺内直子(日本)、Park Mikyung (韓国)の各氏が新理事として就任しました。このうち、Lau 氏は副会長に着任しました。MEAの規約により、Lau 氏は副会長の任期終了後、2012～2014年度は会長を務めることとなります。また、報告者は再び2012年の任期まで事務を担当することになりました。

最後にMEA優秀学生賞についてご報告します。第1回研究会同様、大会での発表内容に基づく学生論文が後日募集され、優秀論文の著者に対して優秀学生賞(Best Student Paper Prize)が授与されました。今回の受賞者は、CUHKのChan Pui Lun氏(論文“Globalizing the Traditional: The Development of Peking Opera in Hong Kong”)、およびメリーランド大学のDiao Ying氏(論文“Compositional Techniques on Lisu Christian Hymnody: Acculturation and Musical Adaptation”)のお二人でした。

2. 第3回 ICTM 東アジア音楽研究会のお知らせ

次回のMEAの大会は、2012年7月31日(火)～8月2日(木)にChinese University of Hong Kongにて行われることになりました。詳細は未定です。

3. 「植民地時代東アジアの音楽研究会」(Musics of Colonial East Asia Interest Group)の発足

MEAはICTM内部の研究会(study group)の一つですが、MEAの内部でさらに、植民地時代の東アジアの音楽に関心をもつ研究者の分科会、Musics of Colonial East Asia Interest Group(略称Moceaig)が発足しました。発起人かつ会長は、ニューイングランド大学(オーストラリア)のHugh de Ferranti氏です。興味のあるMEA会員の方は、以下のサイトから入会申し込みを行ってください。

<https://mail.une.edu.au/lists/cgi-bin/listinfo/moceaig>

4. 第41回 ICTM 世界大会のお知らせ

次回のICTM世界大会は、2011年、カナダのニューファンドランド島(Newfoundland)のメモリアル大学(Memorial University)で、7月13日(水)～19日(火)に行われます。

大会テーマ

1. Indigenous Modernities
2. Cross-cultural Approaches to the Study of the Voice
3. Rethinking Ethnomusicology through the Gaze of Movement
4. Atlantic Roots/Routes
5. Dialogical Knowledge Production and Representation: Implications and Ethics

6. Acoustic Ecology

7. New Research

発表申し込みはすでに締め切られましたが、オブザーバーとしての参加申し込みは可能です。本大会の詳細は、www.mun.ca/ictm をご参照ください。

5. ICTM 担当委員からのお願い

1) 一斉メールについて

東洋音楽学会員の皆様のうち ICTM 会員に対して、ICTM 担当委員より不定期に ICTM に関連するお知らせを一斉メールで送信しています。現在までに一斉メールを受信されていない方、また、現在 ICTM 会員でない方で、今後 ICTM に関するメール連絡を希望される場合は、担当委員(早稲田みな子: minako.waseda@gmail.com) までお知らせください。

2) ICTM 関連の情報提供について

報告者が ICTM 東アジア音楽研究会のメンバーであるため、同研究会に関する情報は会報、機関紙、一斉メール等で皆様に随時お知らせしていますが、他の ICTM 内の研究会については情報薄です。他の研究会に所属している会員の方からの情報を募集します。お寄せいただいた情報を東洋音楽学会員に発信します。ご協力よろしくお願いいたします。

(ICTM 担当委員: 早稲田みな子)

会員の受賞

◇伊東信宏氏が木村重信民族芸術学会賞を受賞

本学会員の伊東信宏氏が第7回木村重信民族芸術学会賞を受賞されました。この賞は、民族芸術に関する優れた著書に授与されるものですが、同氏は『中東欧音楽の回路 ロマ・クレズマー・20世紀の前衛』(岩波書店)の業績が顕彰されました。授賞式は2010年4月24日に江戸東京博物館にて行われました。

月溪恒子先生のご逝去

前号会報が印刷にまわった直後の2010年9月23日に、本学会会長を務められた月溪恒子先生が66歳で逝去されました。9月27日に大阪市の北斎場にて告別式が営まれました。謹んでお悔やみ申し上げます。

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2010年10月16日(土)にお茶の水女子大学文教育学部2号館1階110室において第82回通常理事会が、2010年11月13日(土)に東京学芸大学芸術館・学芸の森ホールにおいて第41回通常総会が行われました。以下に、これらの会議に於ける議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。通常総会の議決事項の詳細については、後掲の第41回通常総会議事録(抄)ならびに添付書類をご参照下さい。

1) 新入会員

2010年4月4日以降に仮承認された14名が正会員として承認されました。

2) 一般社団法人へ移行する方針について

政府の公益法人制度改革に伴い、本学会は2013年11月末日までに、新制度の一般社団法人あるいは公益社団法人のどちらかへ移行することが求められており、理事会では法人改革検討委員会を設置して検討してきましたが、下記の理由により、一般社団法人への移行を目指して準備をはじめの方針が決まりました。2011年の第42回総会において、新定款を含めて正式に提案する予定です。今後の進捗状況については、会報やホームページ等において、随時お知らせする予定です。この件について、ご意見、ご要望、ご質問等のある方は、学会事務局までご連絡下さい。

一般社団法人への移行を目指す主な理由

- ・公益社団法人は事務処理が煩瑣になるにも拘わらず、本学会にとってのメリットが現状では限定的と思われること。
- ・一般社団法人へ移行しても本学会にとって不都合な点はほとんど見出せないこと。
- ・一般社団法人に移行することで求められる現有財産の処理は、会計上の問題として対応可能であること。
- ・他の学協会の動向をみても、2010年秋の段階で公益社団法人へ移行した学協会は僅かであること。

なお、一般社団法人へ移行して以降、新たに申請して公益社団法人へ移行することは制度上可能です。

臨時理事会議決事項のお知らせ

11月14日(日)に東京学芸大学20周年記念飯島会館第4会議室において臨時理事会が行われ、理事の役割分担、各種委員、参事が以下のように決まりましたので、お知らせいたします。

1) 理事

[会長] 金城厚

[副会長] 薦田治子(兼経理)

[東日本支部長] 野川美穂子

[西日本支部長] 寺内直子
[沖縄支部長] 梅田英春
[総務] 遠藤徹、小塩さとみ、竹内有一(兼西日本支部担当)、
横井雅子(兼広報)
[経理] 薦田治子(兼副会長)、早稲田みな子(兼東日本支部
担当)
[機関誌] 加藤富美子、高桑いづみ、藤田隆則
[広報] 高松晃子、横井雅子(兼総務)
[東日本支部担当] 茂手木潔子 早稲田みな子(兼経理)
[西日本支部担当] 竹内有一(兼総務)

2) 支部委員

[東日本] 岡崎淑子、金光真理子、ギラン、マツト、熊沢彩子、
谷口文和、土田牧子、鳥谷部輝彦、配川美加、濱崎友絵、福
田千絵、森田都紀
[西日本] 今田健太郎、上野正章、北見真智子、志村哲、田
中多佳子、寺田吉孝
[沖縄] 大塚拜子、高瀬澄子、三島わかな

3) 各種委員

各種委員会(〇は委員長)

[会報編集委員会] 荻野珠、重田絵美、柴田真希、高松晃子、
星野厚子、柳沢久美子、山口かおり、〇横井雅子
[機関誌編集委員会] 奥中康人、加藤富美子、近藤静乃、
〇高桑いづみ、藤田隆則、増野亜子
[情報委員会] 上野正章、葛西周、ギラン、マツト、高松晃子、
〇竹内有一、塚原健太 永原恵三
[法人改革対策委員会] 遠藤徹、小塩さとみ、〇金城厚、薦
田治子、竹内有一、前原恵美、横井雅子、早稲田みな子

4) 参事

[総務] 遠藤明日香、塚原健太(兼東日本支部)、當間亜紀子、
比嘉舞、真鍋幸枝、森田敬子、山下暁子
[広報] 荻野珠、重田絵美、柴田真希、星野厚子、柳沢久美
子、山口かおり
[東日本支部] 大沼覚子、岡田恵美、葛西周、ジョシ、サワン、
滝口幸子、塚原健太(兼総務)、森真理子、山下正美、吉岡
三貴
[西日本支部] 梶丸岳、金銀周、菌田郁、田鍛智志、龍城千
与枝、田村菜々子、出口実紀、米山知子
[沖縄支部] 飯田くるみ 遠藤美奈、鈴木良枝、長嶺亮子

会費納入についてのお知らせとお願い

◇会費納入のお願い

2010年度の会費が未納の会員の方には、会費請求書と振替
用紙を別便でお届けいたしました。金額をお確かめのうえ、
早速お払い込みくださいますよう、お願い申し上げます。払
い込み用紙を紛失された場合は、学会事務局にお問い合わせ
ください。また複数年度にわたる未納会費は、単年度ずつ分
割して納入することも可能です。お支払いのあった年度から
遡って機関誌を送らせていただきます。

なお、本会報と行き違いに納入がありました場合は、どう
ぞご容赦ください

◇大学院生の会費割引制度、研究生の会費減額制度がありま
す。

制度の利用方法は、学会のHPをご覧ください。

◇卒論発表・修論発表を機に入会された皆様にお願ひ

卒論・修論発表は、本学会に入会した会員の権利とみなさ
れます。つまり発表した時点でその年度の会費の支払い義務
が生じ、以後、退会届を提出しない限り、年会費の支払い義
務が継続します。未納の方は、すみやかに会費を納入して下
さるようお願いいたします。(薦田・早稲田)

第28回 田邊尚雄賞アンケートのお願い

◇アンケートのお願い

第28回田邊尚雄賞は、下記の要領で選考・授与されます。
その選考対象となる会員の業績について、皆様からの情報を
募集いたします。自薦他薦を問いませんので、会員各位の積
極的なご協力をお願いいたします。

対象期間：2010(平成22)年1月1日～12月31日。

アンケート締切：2011(平成23)年2月10日(木) 正午必着。

アンケート記入事項：著者名、著書名、発行年月日、発行所名。

なお、論文の場合は、以上のほか、掲載誌名、巻次、編集
者名、論文頁数を記入してください。

選考委員：井口淳子、大谷紀美子、薦田治子、高松晃子、茂
手木潔子(委員長)

アンケート送り先：(社)東洋音楽学会 第28回田邊尚雄賞選
考委員会

(郵送) 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3三春ビル307号
(FAX) 03-3832-5152

(電子メール) LEN03210@nifty.com

東日本支部からのお知らせ

平成22・23年度の東日本支部の事務局は、下記に移転し

ました。支部専用のメールアドレスを新たに取得しましたので、支部へのご連絡にお使いください。

〔東日本支部事務局〕

〒110-0005 台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号
東洋音楽学会東日本支部事務局
E-mail : tog.higashi@gmail.com

東日本支部の次回の例会は、2月5日(土)午後2時～4時30分に、有明教育芸術短期大学301教室にて行います。内容の詳細は、学会ホームページ、東日本支部だより(2010年12月15日発行)をご覧ください。

西日本支部からのお知らせ

西日本支部の事務局が変わりました。西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、下記、事務局までお申し込みください。

〔西日本支部事務局〕

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1
神戸大学国際文化学研究所 寺内研究室気付
TEL 078-803-7454

〈西日本支部地区〉

沖縄支部からのお知らせ

次回例会日程は未定です。

会員異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加

(2010年9月～12月、訂正箇所は下線部)

〈東日本支部地区〉

〈正会員〉

会員異動は、個人情報保護のため削除しました

〈学生会員〉

◇学生会員から正会員へ

◇退会者
(正会員)

◇逝去者(謹んでご冥福をお祈りいたします)
(正会員)

◆住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail等でも結構です)

◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。

(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)

◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈

(2010年9月~12月、到着順)

『楽道』9, 10, 11, 12月号 正派邦楽会
『アイヌ語地名を歩く—山田秀三の地名研究から—
2010・小樽/せたな』(企画展図録)
『北海道立アイヌ民族文化研究センター年報2009』
北海道立アイヌ民族文化研究センター
『ぎふ民俗音楽』第85号 岐阜県民俗音楽学会
『音楽学』第56巻1号 日本音楽学会
『日本音楽史研究』第7号 上野学園大学日本音楽史研究所
『「アジアのポピュラー音楽—グローバルとローカルの相克」
双書 音楽文化の現在4』 井上貴子編著 勁草書房

新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)

『歌う国民：唱歌、校歌、うたごえ』
渡辺裕、中央公論新社、882円

『宇野功芳：楽に寄す』

宇野功芳、音楽之友社、2,940円

『梅若六郎家の至芸：評伝と玄祥がたり』
梅若六郎玄祥、淡交社、3,990円
『音楽の不思議を解く：音楽はどう生まれ、発展してきたの

か』 坂口博樹、ヤマハ、1,890円

『新版 雅楽入門』増本伎共子、音楽之友社、2,520円

『雅楽の〈近代〉と〈現代〉』
寺内直子、岩波書店、8,400円

『楽譜を抱いて』 ロミ・山田、角川学芸出版、1,500円
『「考える耳」再論：音楽は社会を映す』

渡辺裕、春秋社、1,890円
『奇蹟の正倉院宝物：シルクロードの終着駅』

米田雄介、角川学芸出版、1,680円
『ギターと出会った日本人たち：近代日本の西洋音楽受容史』

ヤマハ、2,100円
『狂気の西洋音楽史』 椎名亮輔、岩波書店、4,830円
『「国民歌」を唱和した時代：昭和の大衆歌謡』

戸ノ下達也、吉川弘文館、1,700円
『さえずり言語起源論：小鳥の歌からヒトの言葉へ』

岡ノ谷一夫、岩波書店、1,260円
『思想としての音楽』 片山杜秀、講談社、1,785円

『創られた「日本の心」神話：「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』

輪島裕介、光文社、998円
『日本の音を聴く(文庫オリジナル版)』

柴田南雄、岩波書店、1,092円
『倍音：音・ことば・身体の文化誌』

中村明一、春秋社、1,785円
『坂東三津五郎：踊りの愉しみ』

坂東三津五郎、長谷部浩、岩波書店、1,995円
『ポップ・ミュージックのゆくえ』

高橋健太郎、アルテスパブリッシング1,890円
『ミュージカル・劇場解体新書』

石原隆司、ヤマハ、2,100円
『民俗小事典：神事と芸能』

神田より子、俵木悟編、吉川弘文館、3,400円
『民謡酒場という青春：高度経済成長を支えた唄たち』

山村基毅、ヤマハ、1,890円
『村上春樹を音楽で読み解く』

栗原裕一郎、日本文芸社、1,689円
『明治唱歌の誕生』 中山エイ子、勉誠出版、8,400円

『謡曲画誌：影印・翻刻・注解』
石黒吉次郎、小林保治編、勉誠出版、13,650円

『欲望の音楽：「趣味」の産業化プロセス』
増淵敏之、法政大学出版局、4,800円

『リアル・ブラジル音楽』
ウィリー・ウォーバー、ヤマハ、2,100円

『流行歌の誕生：「カチューシャの唄」とその時代』
永嶺重敏、吉川弘文館、1,700円

新発売視聴覚資料

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)

●CD

『観世流 舞の囃子(4枚組)』

VZCG-8453~6、13,440円

『神津島の民謡』	COCJ-36399-400、3,000円
『ザ・民謡ベスト』	各2,800円
「北海道・青森編」	COCJ-36461-2
「秋田・岩手編」	COCJ-36463-4
「宮城・山形・福島編」	COCJ-36465-6
「関東・甲信越・中部・北陸・近畿編」	COCJ-36467-8
「中国・四国・九州・沖縄編」	COCJ-36469-70
『高橋竹山 魂の響き』	KICH237~8、3,000円
『二代 富山清琴/富山清琴：地歌の世界』	COCJ-36339、2,500円
『日本琵琶楽大系 (5枚組)』	VZCG-8439~43、16,000円
『長崎浜おどり/花巻囃子』	VZCG-10532、1,200円

編集後記

今号では第61回大会の報告を中心にお送りいたします。研究発表だけでなく、映像発表という新しい形態の発表もあり、活発であった大会の様子をご覧いただければと思います。

このたび役員が交替し、会報担当のメンバーも一部入れ替わりしました。東洋音楽学会や関連学会の情報提供の場として充実をはかってまいります。お気づきのことがございましたら、お知らせくださいますよう、お願いいたします。

(横井雅子)

会報編集委員

理事：高松晃子、横井雅子

参事：荻野珠、重田絵美、柴田真希、星野厚子、
柳澤久美子、山口かおり

第41回通常総会議事録(抄)・添付書類

1. 日時:平成22年11月13日(土) 17:30~18:30
2. 場所:東京学芸大学 芸術館・学芸の森ホール
3. 出席者:273名 (書面出席 213名を含む)
〔備考〕正会員674名、定足数225名
4. 議事事項と審議の経過および結果
定款第25条および第15条2により澤田篤子副会長(金城厚会長代理)が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長を要請し、寺内直子、三島暁子両氏が選出された後、以下の議事を開始した。

第1号議案 役員選任の件

小柴はるみ選挙管理委員長より「役員改選」【添付資料1】について説明があった。議長はこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面議決による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第2号議案 平成21(2009)年度事業報告の件

遠藤徹理事(総務担当)が「平成21(2009)年度事業報告」【添付資料2】について説明を行い、永原恵三理事(総務担当)がJSTについての補足説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面議決による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第3号議案 平成21(2009)年度収支決算の件

植村幸生理事(経理担当)が「平成21(2009)年度収支決算」【添付資料3】について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面議決による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第4号議案 平成22(2010)年8月31日現在財産目録

および貸借対照表の件

植村幸生理事(経理担当)が「平成22(2010)年8月31日現在財産目録および貸借対照表」【添付資料4】について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面議決による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

また蒲生郷昭監事が「監査報告書」【添付資料4-2】を朗読説明した。

第5号議案 平成22(2010)年8月31日現在会員異動状況の件

遠藤徹理事(総務担当)が「平成22(2010)年8月31日現在会員異動状況」添付資料5】について説明を行った。議長がこの承認

を議場に諮ったところ、絶対多数(書面議決による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第6号議案 平成22(2010)年事業計画の件

遠藤徹理事(総務担当)が「平成22(2010)年8月31日事業計画」【添付資料6】について、議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面議決による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。また附帯決議として、遠藤徹理事(総務担当)が一般社団法人への移行へ向けての理事会の基本方針について補足説明し、平成22年度から準備をはじめの旨、説明を行った。

第7号議案 平成22(2010)年度収支予算の件

植村幸生理事(経理担当)が「平成22(2010)年度収支予算」【添付資料7】について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面議決による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第8号議案 その他

議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案は出されなかった。

.....

【以下、添付書類】

【添付資料2】平成21年度(2009年度)事業報告
(自平成21年(2009年)9月1日 至平成22年(2010年)8月31日)

〔1〕研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2009年10月17日
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・課題 「人の移動と音楽」

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2009年10月18日
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・発表件数23件

(3)次年度大会の準備

- ・日時 2010年11月13日~14日
- ・会場 東京学芸大学

(4)定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 7回(第46回~第52回 9・12・2・3・4・6・7月)
- ・会場 お茶の水女子大学、東京芸術大学、亜細亜大学、国際基督教大学、有明教育芸術短期大学
- ・内容 研究発表、講演、報告、卒業論文・修士論文・

博士論文発表

○西日本支部

- ・回数 5回(第245回～第249回 1・2・5・7月)
- ・会場 京都教育大学、京都市立芸術大学、大阪市立大学
- ・内容 研究発表、講演、修士論文・博士論文発表、展示見学
- ・備考 第246回は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究と共催、第247回の講演は公益信託小泉文夫記念民族音楽基金との共催

○沖縄支部

- ・回数 1回(第54回 4月)
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・内容 調査報告

[2] 学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款施行細則第3条4)

○第75号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、資料紹介、書評・視聴覚資料評・書籍紹介、追悼、彙報

(6) 会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第77号(2009年9月)、第78号(2010年1月)、第79号(2010年5月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

- ・第21号(2009年11月)、第22号(2010年3月)、第23号(2010年6月)
- ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

○『西日本支部だより』

- ・第66号(2010年1月)、第67号(2010年6月)
- ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

○『沖縄支部通信』

なし

[3] 関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7) 日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

(8) 音楽文献目録委員会への参加

○会員千葉優子氏(2010年3月まで)、横井雅子氏(2010年3月まで)、蒲生美津子氏、前原恵美氏(2010年4月から)、

増野亜子氏(2010年4月から)を委員として派遣

(9) 国際伝統音楽学会(ICTM)への協力

○日本国内委員会として加盟

(10) 芸術学関連学会連合への参加

○会員金城厚氏を委員として派遣

[4] 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(11) 「田邊尚雄賞」(定款施行細則第3条5)

○第26回田邊尚雄賞の授賞

- ・日時 2009年10月17日
- ・受賞者および受賞対象
田中多佳子『ヒンドゥー教徒の集団歌謡—神と人の連鎖構造』(世界思想社、2008年2月発行)

○第27回田邊尚雄賞の選考と発表

・受賞者および受賞対象

1. Hugh de Ferranti “The Last Biwa Singer : A Blind Musician in History, Imagination and Performance” (New York, Cornell University. 2009年発行)

2. 塚原康子『明治国家と雅楽—伝統の近代化／国楽の創成』(有志舎、2009年12月発行)

[5] 研究および調査(定款第5条5)

(12) 国内または国外における学術調査および研究

とくになし

[6] その他目的を達成するために必要な事項

(定款第5条6)

(13) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(14) 独立行政法人科学技術振興機構(JST)電子アーカイブ事業への参加

【添付資料6】平成22年度(2010年度)事業計画

(自平成22年(2010年)9月1日 至平成23年(2011年)8月31日)

[1] 研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1) 公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2010年11月13日
- ・会場 東京学芸大学
- ・課題 「日中仏教音楽の諸相」

(2) 研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2010年11月14日
- ・会場 東京学芸大学
- ・発表件数31件

(3) 次年度大会の準備

- ・日時 2011年10月(予定)
- ・会場 京都教育大学

(4) 定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 6回(第53回～第58回 12・2・3・4・6・7月)

- ・会場 東京芸術大学ほか
- ・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか
- 西日本支部
 - ・回数 5回(第250回～第254回 12・2・4・5・6月)
 - ・会場 国立民族学博物館ほか
 - ・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
- 沖縄支部
 - ・回数 3回(第55回～第57回 12・4・7月)
 - ・会場 沖縄県立芸術大学
 - ・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
- [2] 学会誌および学術図書のパブリケーション(定款第5条2)
- (5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款施行細則第3条4)
- 第76号の編集・刊行
 - ・内容 会員の論文、研究ノート、研究動向、書評・視聴覚資料評・書籍紹介・視聴覚資料紹介ほか
- (6)会報の刊行
- 『東洋音楽学会会報』
 - ・第80号(2010年9月)、第81号(2011年1月)、第82号(2011年5月)
 - ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息
- 『東日本支部だより』
 - ・第24号(2010年11月)、第25号(2011年3月)、第26号(2011年6月)
 - ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか
- 『西日本支部だより』
 - ・第68号(2010年10月)、第69号(2011年1月)、第70号(2011年5月)
 - ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか
- 『沖縄支部通信』
 - ・第34号(2010年12月)、第35号(2011年7月)
 - ・内容 例会案内、発表内容・質疑記録
- [3] 関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)
- (7)日本学術会議への協力
- 日本学術会議協力学術研究団体として協力
- (8)音楽文献目録委員会への参加
- 会員三名を委員として派遣
- (9)国際伝統音楽学会(ICTM)への協力
- 日本国内委員会として加盟
- (10)芸術学関連学会連合への参加
- 会員一名を委員として派遣
- [4] 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)
- (11)「田邊尚雄賞」(定款施行細則第3条5)
- 第27回田邊尚雄賞の授賞
 - ・日時 2010年11月13日
 - ・受賞者および受賞対象
 - 1. Hugh de Ferranti "The Last Biwa Singer : A Blind Musician in History, Imagination and Performance" (New York, Cornell University. 2009年発行)
 - 2. 塚原康子『明治国家と雅楽—伝統の近代化／国楽の創成』(有志舎、2009年12月発行)
- 第28回田邊尚雄賞の選考と発表(2011年4月予定)
 - [5] 研究および調査(定款第5条5)
 - (12)国内または国外における学術調査および研究とくになし
 - [6] その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)
 - (13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供
 - (14)独立行政法人科学技術振興機構(JST)電子アーカイブ事業への参加

【添付資料1】

役員選出資料

1. 2010年度役員選挙 開票結果

- (1) 有権者数 640名 (2010年8月1日現在)
- (2) 被選挙権停止者数 9名
- (3) 被選挙権休止者数 8名
- (4) 投票締切日 2010年9月22日(水)
- (5) 開票日時 2010年9月24日(金) 午前10時より午後6時
- (6) 開票場所 お茶の水女子大学文教育2号館110室
- (7) 投票者数 140名 (投票率21.9%)
- (8) 開票結果

ア. 監事 総記入数 280
うち 有効記入数 279 うち白票(無記入)数 31
無効記入数 1

	順位	得票数	氏名
当選	1	17	竹内 道敬
当選	2	15	蒲生 美津子
次点	2	15	山口 修
	4	11	福島 和夫
	4	11	久保田 敏子
	6	9	樋口 昭
	6	9	大谷 紀美子

(8票以下省略)

イ. 理事 総記入数 1120
うち 有効記入数 1119 うち白票(無記入)数 109
無効記入数 1

順位	得票数	氏名	順位	得票数	氏名	
当選	1	41	小塩 さとみ	12	17	小柴 はるみ
当選	2	39	遠藤 徹	13	16	岡崎 淑子
当選	2	39	薦田 治子	14	15	梅田 英春
当選	4	38	金城 厚			寺田 吉孝
当選	5	36	茂手木 潔子	16	13	高松 晃子
当選	6	32	高桑 いづみ			久保田 敏子
当選	6	32	野川 美穂子			早稲田 みな子
当選	8	31	藤田 隆則	19	12	横井 雅子
当選	9	29	寺内 直子			龍村 あや子
当選	10	27	竹内 有一			蒲生 美津子
						山田 智恵子
次点	11	26	加藤 富美子			(11票以下省略)

2. 選考過程

理事・監事の選出については、定款施行細則第 8 条から第 13 条までの各条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいておこなわれた。

監事の当選順位 2 位（得票 15 票）が 2 名となったため、開票直後に選挙管理委員が抽選を行った。その結果、蒲生美津子が当選者、山口修が次点者となった。

選挙管理委員会は、開票結果を会長に報告するとともに、各当選者に当選の通知を行った。また、定款施行細則第 8 条に基づき、選挙管理委員会は、理事当選者 10 名に対して、他の 5 名を合議することを求めた。その合議の結果、梅田英春、加藤富美子、高松晃子、横井雅子、早稲田みな子の 5 名が理事として推薦された。

3. 2010 年度役員選任原案

(1) 監事 2 名

蒲生 美津子 竹内 道敬

(2) 理事 15 名

梅田 英春	竹内 有一
遠藤 徹	寺内 直子
小塩 さとみ	野川 美穂子
加藤 富美子	藤田 隆則
金城 厚	茂手木 潔子
薦田 治子	横井 雅子
高桑 いづみ	早稲田 みな子
高松 晃子	

(社)東洋音楽学会 2010 年度選挙管理委員会

小柴 はるみ (委員長)

高松 晃子 (副委員長)

丸山 洋司

山下 暁子

山下 正美

【添付書類3】

収 支 計 算 書

平成21年9月1日から平成22年8月31日まで

(単位 円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
① 基本財産運用収入	20,000	17,425	2,575	
基本財産利息収入	20,000	17,425	2,575	
② 会 費 収 入	5,760,000	5,011,000	749,000	
正会員会費収入	5,360,000	4,611,000	749,000	
賛助会員会費収入	200,000	200,000	0	
特別会員会費収入	200,000	200,000	0	
③ 事 業 収 入	510,000	450,000	60,000	
機関誌発行事業収入	500,000	450,000	50,000	
その 他 事業収入	10,000	0	10,000	
④ 雑 収 入	40,000	48,274	2,948	
受 取 利 息	30,000	27,052	2,948	
雑 収 入	10,000	21,222		
⑤ 繰入金収入	0	619,789	△ 619,789	
大会特別会計収入	0	619,789	△ 619,789	
事業活動収入計	6,330,000	6,146,488	194,734	
2. 事業活動支出				
① 事 業 費	5,673,000	4,881,154	791,846	
機関誌作成費	1,200,000	1,138,167	61,833	
負担金	200,000	187,000	13,000	
印刷費	250,000	238,934	11,066	
広報普及費	250,000	205,164	44,836	
給料手当	1,440,000	1,226,917	213,083	
田邊尚雄賞金等	150,000	211,865	△ 61,865	
通信費	450,000	375,067	74,933	
旅費交通費	400,000	189,535	210,465	
会議費	100,000	13,899	86,101	
事務用品費	63,000	34,608	28,392	
事務所費	720,000	667,748	52,252	
事務委託費	360,000	378,000	△ 18,000	
雑費	90,000	14,250	75,750	
② 管 理 費	347,000	511,185	△ 164,185	
給料手当	160,000	136,300	23,700	
通信費	50,000	181,379	△ 131,379	
旅費交通費	0	67,805	△ 67,805	
事務用品費	7,000	3,713	3,287	
事務所費	80,000	74,188	5,812	
事務委託費	40,000	42,000	△ 2,000	
雑費	10,000	5,800	4,200	
③ 支部繰入金支出	1,000,000	855,763	144,237	
東日本支部繰入金	540,000	513,547	26,453	
西日本支部繰入金	400,000	339,157	60,843	
沖繩支部繰入金	60,000	3,059	56,941	
④ 繰入金支出	200,000	0	200,000	
大会特別会計支出	200,000	0	200,000	
事業活動支出計	7,220,000	6,248,102	971,898	
事業活動収支差額	△ 890,000	△ 101,614	△ 777,164	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
① 特定資産等取崩収入				
田邊尚雄賞基金取崩収入	150,000	150,000	0	
支払準備基金取崩収入	3,802,650	3,802,650	0	
建物取得準備預金取崩収入	1,819,741	1,819,741	0	
投資活動収入計	5,772,391	5,772,391	0	
2. 投資活動支出				
① 特定資産等繰入支出				
研究推進事業基金繰入支出	4,782,391	3,669,746	1,112,645	
投資活動支出計	4,782,391	3,669,746	1,112,645	
投資活動収支差額	990,000	2,102,645	△ 1,112,645	
III 予備費支出	100,000	-	100,000	
当期収支差額	0	2,001,031	△ 2,001,031	
前期繰越収支差額	1,954,129	1,954,129	0	
次期繰越収支差額	1,954,129	3,955,160	△ 2,001,031	

収支計算書に対する注記

1. 資金の範囲について

資金の範囲は現金、預金、未収入金、前渡金及び未払金、預り金、前受金を含めている。

なお前期末及び当期末残高は下記2に記載するとおりである。

2. 次期繰越収支差額の内容は次のとおりである。

次期繰越収支差額の内訳

(単位 円)

項目	前期	当期
現金預金	1,150,129	3,029,456
未収入金	906,000	1,356,000
前渡金	200,000	2,000
未払金	100,000	200,000
預り金	10,000	13,296
前受金	192,000	219,000
次期繰越収支差額	1,954,129	3,955,160

総括収支計算書

平成21年9月1日から平成22年8月31日まで

社団法人 東洋音楽学会

(単位 円)

科 目	本 部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引 消去	合 計
I 事業活動収支の部							
1. 事業活動収入							
① 基本財産運用収入	17,425	0	0	0	0	0	17,425
基本財産利息収入	17,425						17,425
② 会 費 収 入	5,011,000	631,500	0	0	0	0	5,642,500
正会員会費収入	4,611,000						4,611,000
賛助会員会費収入	200,000						200,000
特別会員会費収入	200,000						200,000
大会参加費収入		283,000					283,000
その他の収入		348,500					348,500
③ 事 業 収 入	450,000	705,000	0	0	1,500	0	1,156,500
機関誌発行事業収入	450,000						450,000
その他事業収入	0	705,000			1,500		706,500
④ 雑 収 入	48,274	0	85	78	19	0	48,456
受取利息	27,052		85	78	19		27,234
雑 収 入	21,222						21,222
⑤ 繰入金収入	619,789	0	513,547	339,157	3,059	Δ 1,475,552	0
事業活動収入計	6,146,488	1,336,500	513,632	339,235	4,578	Δ 1,475,552	6,864,881
2. 事業活動支出							
① 事 業 費	4,881,154	716,711	513,632	339,235	4,578	0	6,455,310
機関誌作成費	1,138,167						1,138,167
負担金	187,000						187,000
印刷費	238,934	243,600	103,834	83,825			670,193
例会運営費	0		150,704	44,701			195,405
広報普及費	205,164						205,164
田邊尚雄賞賞金等	211,865						211,865
通信費	375,067	33,430	232,026	144,200	4,410		789,133
旅費交通費	189,535			53,520			243,055
給料	1,226,917	112,100	11,600				1,350,617
事務用品費	34,608		3,760	3,080	168		41,616
事務所費	667,748						667,748
事務委託費	378,000						378,000
会議費	13,899		8,238	8,755			30,892
会場費	0	75,000					75,000
謝金	0	45,000					45,000
その他	14,250	207,581	3,470	1,154			226,455
② 管 理 費	511,185						511,185
給料手当	136,300						136,300
通信費	181,379						181,379
旅費交通費	67,805						67,805
事務用品費	3,713						3,713
事務所費	74,188						74,188
事務委託費	42,000						42,000
雑 費	5,800						5,800
③ 支部繰入金支出	855,763					Δ 855,763	0
④ 繰入金支出	0	619,789				Δ 619,789	0
事業活動支出計	6,248,102	1,336,500	513,632	339,235	4,578	Δ 1,475,552	6,966,495
事業活動収支差額	Δ 101,614	0	0	0	0	0	Δ 101,614
II 投資活動収支の部							
1. 投資活動収入							
特定基金取崩収入	3,952,650						3,952,650
特定預金取崩収入	1,819,741						1,819,741
投資活動収入計	5,772,391						5,772,391
2. 投資活動支出							
特定基金等繰入支出	3,669,746						3,669,746
投資活動支出計	3,669,746						3,669,746
投資活動収支差額	2,102,645						2,102,645
III 予備費支出	-						0
当期収支差額	2,001,031	0	0	0	0	0	2,001,031
前期繰越収支差額	1,954,129						1,954,129
次期繰越収支差額	3,955,160	0	0	0	0	0	3,955,160

【添付書類4】

貸借対照表

平成22年8月31日 現在

社団法人 東洋音楽学会

(単位: 円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	3,029,456	1,150,129	1,879,327
未収入金	1,356,000	906,000	450,000
前 渡 金	2,000	200,000	△ 198,000
流動資産合計	4,387,456	2,256,129	2,131,327
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	5,200,000	5,200,000	0
基本財産合計	5,200,000	5,200,000	0
(2) 特定資産			
支払準備基金	0	3,802,650	△ 3,802,650
研究推進事業基金	8,194,946	4,525,200	3,669,746
田邊尚雄基金	3,200,000	3,350,000	△ 150,000
特定資産合計	11,394,946	11,677,850	△ 282,904
(3) その他固定資産			
什器備品	128,958	161,880	△ 32,922
書籍	310,600	310,600	0
建物取得準備預金	0	1,819,741	△ 1,819,741
差入敷金	300,000	300,000	0
電話加入権	149,968	149,968	0
その他固定資産合計	889,526	2,742,189	△ 1,852,663
固定資産合計	17,484,472	19,620,039	△ 2,135,567
資 産 合 計	21,871,928	21,876,168	△ 4,240
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	200,000	100,000	100,000
預り金	13,296	10,000	3,296
前受金	219,000	192,000	27,000
流動負債合計	432,296	302,000	130,296
負 債 合 計	432,296	302,000	130,296
III 正味財産の部			
1. 一般正味財産	21,439,632	21,574,168	△ 134,536
(うち基本財産への充当額)	(5,200,000)	(5,200,000)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(11,394,946)	(11,677,850)	(△346,412)
正味財産合計	21,439,632	21,574,168	△ 134,536
負債及び正味財産合計	21,871,928	21,876,168	△ 4,240

正味財産増減計算書総括表

平成21年9月1日から平成22年8月31日まで

社団法人 東洋音楽学会

(単位 円)

科 目	本 部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引 相消	合 計
I 一般正味財産増減の部							
経常増減の部							
(1) 経常収益							
① 基本財産運用収入	17,425	0	0	0	0	0	17,425
基本財産利息収入	17,425						17,425
② 会 費 収 入	5,011,000	631,500	0	0	0	0	5,642,500
正会員会費収入	4,611,000						4,611,000
賛助会員会費収入	200,000						200,000
特別会員会費収入	200,000						200,000
大会参加費収入		283,000					283,000
その他の収入		348,500					348,500
③ 事 業 収 入	450,000	705,000	0	0	1,500	0	1,156,500
機関誌発行事業収入	450,000						450,000
その他の事業収入	0	705,000			1,500		706,500
④ 雑 収 入	48,274	0	85	78	19	0	48,456
受取利息	27,052		85	78	19		27,234
雑 収 入	21,222						21,222
⑤ 繰入金収入	619,789	0	513,547	339,157	3,059	△1,475,552	0
経常収益計	6,146,488	1,336,500	513,632	339,235	4,578	△1,475,552	6,864,881
(2) 経常費用							
① 事 業 費	4,910,784	716,711	513,632	339,235	4,578	0	6,484,940
機関誌作成費	1,138,167						1,138,167
負担金	187,000						187,000
印刷費	238,934	243,600	103,834	83,825			670,193
広報普及費	205,164						205,164
例会運営費			150,704	44,701			195,405
田邊尚雄賞賞金等	211,865						211,865
通信費	375,067	33,430	232,026	144,200	4,410		789,133
旅費交通費	189,535		0	53,520			243,055
給料	1,226,917	112,100	11,600				1,350,617
事務用品費	34,608		3,760	3,080	168		41,616
事務所費	667,748						667,748
事務委託費	378,000						378,000
会議費	13,899		8,238	8,755			30,892
会場費		75,000					75,000
謝金		45,000					45,000
その他	14,250	207,581	3,470	1,154			226,455
減価償却費	29,630						29,630
② 管理費	514,477						514,477
給料手当	136,300						136,300
通信費	181,379						181,379
旅費交通費	67,805						67,805
事務用品費	3,713						3,713
事務所費	74,188						74,188
事務委託費	42,000						42,000
雑 費	5,800						5,800
減価償却費	3,292						3,292
③ 支部繰入金支出	855,763					△855,763	0
④ 繰入金支出	0	619,789				△619,789	0
経常費用計	6,281,024	1,336,500	513,632	339,235	4,578	△1,475,552	6,999,417
当期経常増減額	△134,536	0	0	0	0	0	△134,536
経常外増減の部							
(1) 経常外費用							
固定資産除却損							0
経常外費用計	0						0
当期経常外増減額	0						0
当期一般正味財産増減額	△134,536	0	0	0	0	0	△134,536
一般正味財産期首残高	21,574,168	0	0	0	0	0	21,574,168
一般正味財産期末残高	21,439,632	0	0	0	0	0	21,439,632
II 正味財産期末残高	21,439,632	0	0	0	0	0	21,439,632

財務諸表に対する注記

1. 重要な会計方針

- (1) 有価証券の評価基準及び評価方法
移動平均法による原価法
- (2) 棚卸資産の評価基準及び評価方法
移動平均法による原価法
- (3) 固定資産の減価償却の方法
定額法
- (4) 消費税等の会計処理
税込み方式

2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

(単位円)

科 目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
定期預金	5,200,000			5,200,000
小 計	5,200,000	0	0	5,200,000
特定資産				
支払準備基金				
定期預金	1,000,000	0	1,000,000	0
郵便貯金	1,293,987	0	1,293,987	0
普通預金	663,718	0	663,718	0
定期貯金	844,945	0	844,945	0
研究推進事業基金				
定期貯金	4,525,200	2,669,746	0	7,194,946
定期預金	0	1,000,000	0	1,000,000
田邊尚雄賞基金				
定期預金	3,350,000		150,000	3,200,000
小 計	11,677,850	3,669,746	3,952,650	11,394,946
合 計	16,877,850	3,669,746	3,952,650	16,594,946

3. 基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等は、次のとおりである。

(単位円)

科 目	当期末残高	(うち指定正味財産 からの充当額)	(うち一般正味財 産からの充当額)	(うち負債に対応 する額)
基本財産				
定期預金	5,200,000		5,200,000	
小 計	5,200,000		5,200,000	
特定資産				
研究推進事業基金				
定期貯金	7,194,946		7,194,946	
定期預金	1,000,000		1,000,000	
田邊尚雄賞基金				
定期預金	3,200,000		3,200,000	
小 計	11,394,946		11,394,946	
合 計	16,594,946		16,594,946	

4. 担保に供している資産

なし

5. 固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は次のとおりである。

(単位円)

科 目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高	備 考
什 器 備 品	576,312	447,354	128,958	
書 籍	310,600	0	310,600	
合 計	886,912	447,354	439,558	

以上

財 産 目 録

社団法人 東洋音楽学会

平成22年8月31日 現在

(単位 円)

科 目	金 額		
I 資 産 の 部			
1 流 動 資 産			
現 金 預 金			
現 金 現金手許有高	107,570		
振替口座 郵便振替口座	176,892		
通常郵便貯金 上野黒門郵便局	1,294,633		
普通預金 三菱UFJ信託銀行上野支店	462,945		
普通預金 三菱東京UFJ銀行日本橋支店	693,179		
定期預金 三菱UFJ信託銀行上野支店	150,000		
各支部 現金、預金	144,237		
計	3,029,456		
未収入金			
アカデミア 機関誌販売代金	1,356,000		
計	1,356,000		
前 渡 金			
会費前渡	2,000		
計	2,000		
流 動 資 産 合 計		4,387,456	
2 固 定 資 産			
(1)基 本 財 産			
定期預金			
三菱UFJ信託銀行上野支店	5,200,000		
基 本 財 産 合 計	5,200,000		
(2)特定資産			
研究推進事業基金			
定額郵便貯金 上野黒門郵便局	7,194,946		
定期預金 三菱UFJ信託銀行上野支店	1,000,000		
計	8,194,946		
田邊尚雄賞基金			
定期預金 三菱UFJ信託銀行上野支店	3,200,000		
計	3,200,000		
基 金 合 計	11,394,946		
(3)その他の固定資産			
什 器 備 品 (事務用機器等)	128,958		
書 籍	310,600		
差 入 敷 金			
事務所敷金	300,000		
電 話 加 入 権			
本部電話加入権 2本	149,968		
その他の固定資産合計	889,526		
固 定 資 産 合 計		17,484,472	
資 産 合 計			21,871,928
II 負 債 の 部			
未 払 金			
田邊賞未払	200,000		
預 り 金			
源泉所得税預り	13,296		
前 受 金			
平成22年度以降会費前受	199,000		
次年度開催大会プログラム広告代	20,000		
計	219,000		
流 動 負 債 合 計		432,296	
負 債 合 計			432,296
正 味 財 産			21,439,632

【添付書類4-2】

監査報告書

社団法人 東洋音楽学会
会長 金城 厚 殿

平成22年10月15日
監事 蒲生 郷昭
監事 徳丸 吉彦

私たちは、平成21年9月1日から平成22年8月31日までの平成21年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1. 監査の方法の概要

- (1) 会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

2. 監査意見

- (1) 平成21年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。
- (2) 事業報告書の内容は真実であると認める。
- (3) 理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上

【添付書類5】

会員の異動状況 (平成21年. 9. 1～平成22年. 8. 31)

(2009年)

(2010年)

●印・・・東日本支部

◆印・・・西日本支部

■印・・・沖縄支部

#印・・・海外在住

会員種別	会 員 数		増減	異 動 の 内 訳
	2009. 9. 1	2010. 8. 31		
正会員	669	656	-13	新入+30、学生より+8、退会-48、逝去-3 新入+8、正会員へ-8
学生会員	10	10	0	
賛助会員	2	2	0	
特別会員	8	8	0	
名誉会員	3	3	0	
	692	679	-13	

【添付書類7】

収 支 予 算 書

平成22年9月1日から平成23年8月31日まで

(単位 円)

科 目	予 算 額	前 期 当 初 予 算	増 減	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
① 基本財産運用収入	20,000	20,000	0	
基本財産利息収入	20,000	20,000	0	
② 会 費 収 入	6,000,000	5,760,000	240,000	
正会員会費収入	5,600,000	5,360,000	240,000	
賛助会員会費収入	200,000	200,000	0	
特別会員会費収入	200,000	200,000	0	
③ 事 業 収 入	450,000	510,000	△60,000	
機関誌発行事業収入	450,000	500,000	△50,000	
そ の 他 事 業 収 入	0	10,000	△10,000	
④ 雑 収 入	40,000	40,000	0	
受 取 利 息	30,000	30,000	0	
雑 収 入	10,000	10,000	0	
事業活動収入計	6,510,000	6,330,000	180,000	
2. 事業活動支出				
① 事 業 費	5,608,000	5,673,000	△65,000	
機関誌作成費	1,200,000	1,200,000	0	
負 担 金	200,000	200,000	0	
印 刷 費	250,000	250,000	0	
広 報 普 及 費	200,000	250,000	△50,000	
給 料 手 当	1,440,000	1,440,000	0	
田邊尚雄賞賞金等	150,000	150,000	0	
通 信 費	405,000	450,000	△45,000	
旅 費 交 通 費	340,000	400,000	△60,000	
会 議 費	100,000	100,000	0	
事 務 用 品 費	63,000	63,000	0	
事 務 所 費	720,000	720,000	0	
事 務 委 託 費	450,000	360,000	90,000	
雑 費	90,000	90,000	0	
② 管 理 費	412,000	347,000	65,000	
給 料 手 当	160,000	160,000	0	
通 信 費	45,000	50,000	△5,000	
旅 費 交 通 費	60,000	0	60,000	
事 務 用 品 費	7,000	7,000	0	
事 務 所 費	80,000	80,000	0	
事 務 委 託 費	50,000	40,000	10,000	
雑 費	10,000	10,000	0	
③ 支 部 繰 入 金 支 出	1,000,000	1,000,000	0	
東日本支部繰入金	540,000	540,000	0	
西日本支部繰入金	400,000	400,000	0	
沖縄支部繰入金	60,000	60,000	0	
④ 繰 入 金 支 出	800,000	200,000	600,000	
大会特別会計支出	400,000	0	400,000	
大会特別会計支出未払金	400,000	200,000	200,000	
事業活動支出計	7,820,000	7,220,000	600,000	
事業活動収支差額	△1,310,000	△890,000	△420,000	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
① 特定基金取崩収入	1,410,000	5,772,391	△4,362,391	
田邊尚雄賞基金取崩収入	150,000	150,000	0	
研究推進事業基金取崩収入	1,260,000	0	1,260,000	
支払準備基金取崩収入	0	3,802,650	△3,802,650	
建物取得準備預金取崩収入	0	1,819,741	△1,819,741	
投資活動収入計	1,410,000	5,772,391	△4,362,391	
2. 投資活動支出				
① 特定基金繰入支出	0	4,782,391	△4,782,391	
研究推進事業基金繰入支出	0	4,782,391	△4,782,391	
投資活動支出計	0	4,782,391	△4,782,391	
投資活動収支差額	1,410,000	990,000	420,000	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入	0	0	0	
2. 財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出	100,000	100,000	0	
当期収支差額	0	0	0	
前期繰越収支差額	3,955,160	1,954,129	2,001,031	
次期繰越収支差額	3,955,160	1,954,129	2,001,031	

総括収支予算書

平成22年9月1日から平成23年8月31日まで

(単位 円)

社団法人 東洋音楽学会

科 目	本 部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	調 整	合 計
I 事業活動収支の部							
1. 事業活動収入							
① 基本財産運用収入	20,000	0	0	0	0	0	20,000
基本財産利息収入	20,000						20,000
② 会 費 収 入	6,000,000	340,000	0	0	0	0	6,340,000
正会員会費収入	5,600,000						5,600,000
賛助会員会費収入	200,000						200,000
特別会員会費収入	200,000						200,000
大会参加費収入		100,000					100,000
その他の収入		240,000					240,000
③ 事 業 収 入	450,000	500,000	0	0	3,000	0	953,000
機関誌発行事業収入	450,000						450,000
その 他 事業収入	0	500,000			3,000		503,000
④ 雑 収 入	40,000	0	0	0	0	0	30,000
受 取 利 息	30,000						30,000
雑 収 入	10,000						
⑤ 繰入金収入	0	400,000	540,000	400,000	60,000	Δ 1,400,000	0
事業活動収入計	6,510,000	1,240,000	540,000	400,000	63,000	Δ 1,400,000	7,343,000
2. 事業活動支出							
① 事 業 費	5,608,000	1,160,000	540,000	400,000	63,000	0	7,771,000
機関誌作成費	1,200,000						1,200,000
負担金	200,000						200,000
印刷費	250,000	400,000	190,000	130,000	20,000		990,000
広報普及費	200,000	100,000					300,000
例 会 運 営 費	0		90,000	80,000	20,000		190,000
給 料	1,440,000	100,000	20,000	15,000	5,000		1,580,000
田邊尚雄賞賞金等	150,000						150,000
通 信 費	405,000	30,000	200,000	130,000	10,000		775,000
旅 費 交 通 費	340,000	10,000	10,000	30,000	1,000		391,000
会 議 費	100,000	10,000	10,000	5,000	1,000		126,000
事 務 用 品 費	63,000		15,000	5,000	5,000		88,000
会 場 費	0	20,000					20,000
謝 金	0	200,000					200,000
事 務 所 費	720,000						720,000
事 務 委 託 費	450,000						450,000
そ の 他	90,000	290,000	5,000	5,000	1,000		391,000
② 管 理 費	412,000						412,000
給 料 手 当	160,000						160,000
通 信 費	45,000						45,000
旅 費 交 通 費	60,000						60,000
事 務 用 品 費	7,000						7,000
本 部 事 務 所 費	80,000						80,000
事 務 委 託 費	50,000						50,000
雑 費	10,000						10,000
③ 支部繰入金支出	1,000,000					Δ 1,000,000	0
④ 繰入金支出	800,000					Δ 400,000	400,000
事業活動支出計	7,820,000	1,160,000	540,000	400,000	63,000	Δ 1,400,000	8,583,000
事業活動収支差額	Δ 1,310,000	80,000	0	0	0	0	Δ 1,230,000
II 投資活動収支の部							
1. 投資活動収入							
特定基金等取崩収入	1,410,000						1,410,000
投資活動収入計	1,410,000						1,410,000
2. 投資活動支出							
特定基金繰入支出	0						0
投資活動支出計	0						0
投資活動収支差額	1,410,000						1,410,000
III 財務活動収支の部							
1. 財務活動収入	0						0
2. 財務活動支出	0						0
財務活動収支差額	0						0
IV 予備費支出	100,000	80,000					180,000
当期収支差額	0	0	0	0	0	0	0
前期繰越収支差額	3,955,160						3,955,160
次期繰越収支差額	3,955,160	0	0	0	0	0	3,955,160